

# 西田哲学会会報

第十号

題字 上田閑照

発行・西田哲学会事務局  
石川県かほく市内日角井一番地  
石川県西田幾多郎記念哲学館内  
電話(0762)836600

西田哲学会第十回年次大会が、平成二十四年七月二十一日(土)、二十二日(日)の両日、京都産業大学にて開催された。本大会は学会発足十年を迎える記念すべき大会である。大会報告のうち、外国語セッションとシンポジウムについては別に報

告がなされる予定であり、本記事はそれ以外のプログラムについての概要を伝えるものである。大会は両日とも好天に恵まれ、また、京都産業大学の整った設備と、配慮の行き届いた学生たちによって円滑に大会を行なうことができた。

午後の部においては、田中裕氏(上智大学)「西田哲学と私」、木村敏氏(京都リスト教)と、木村敏氏(京都大学名誉教授)「西田哲学と私の精神病理学」の二つの講演が行われた。田中氏は、西田のキリスト教論は仏教徒に映ったキリスト教であるとして、西田の宗教論の性格は己事究明にあり、この性格のもと経験に徹底し、無と絶対否定の大いなる道を歩むことで西田は自身の思想を彌詮してきた、そしてその道においては仏教とキリスト教とがともながら通うものであつたと説き、西田哲学の全期に亘つて西田によるキリスト教理解の特徴を丹念にたどり、西田哲学において登場する「無」とは、ただに仏教のある東洋概念の枠に収まるものではな

く、「絶対否定のことばによる語セッションと、一般向けの講読会である『善の研究』講読会が行われた。『善の研究』講読会を担当したのは米山優氏(名古屋大学)と杉本耕一氏(関西大学)で、丁寧に準備され好評だった。

午後の部においては、田中裕氏(上智大学)「西田哲学と私の精神病理学」の二つの講演が行われた。田中氏は、西田のキリスト教論は仏教徒に映ったキリスト教など、いかなる立場にも束縛されえず、むしろこれらを融通無礙に貫くよう取り扱うことで明らかとなるものであることが説得力をもって示された。

木村氏は精神科医としての長い豊富な臨床経験に基づき、年間の豊富な臨床経験に基づき、臨床と西田哲学との対話を講演において試みられた。木村氏は、離人症、統合失調症といった病理を「主体の病理」であると述べ、これらの病理を解明する鍵は自己の分析にあるが、自己は自己単独で定立されるのではなく、世界と自己の両方の視座を

強烈なインパクト」の端的な表現であり、そのように捉えることから西田哲学とキリスト教は眞の意味で架橋され、根源的創造の場で出会うこととなると述べた。講演では、「聖地がある場所と悲哀のある場所は同じである」、「神への上昇の道は自己自身への下降の道である」など、印象深い表現が随所に用いられ、力強く内容豊かな印象を覚えさせるとともに、無という視座が、自己/世界、仏教/キリスト教など、いかなる立場にも束縛されえず、むしろこれらを融通無碍に貫くよう取り扱うこ

とが説得力をもって示された。木村氏は精神科医としての長い豊富な臨床経験に基づき、年間の豊富な臨床経験に基づき、臨床と西田哲学との対話を講演において試みられた。木村氏は、

講演を通じて、田中、木村両氏とも「世界」もしくは「自己と世界」という深長な問題を多面的に扱い、互いに響きあう内容がはからずも展開されたようになされた。

二十二日の午前の部では研究発表が行われ、松本直樹氏(京都府立医科大学)「西田幾多郎『善の研究』における過去意識の問題」、三宅浩史氏(金沢大学)『現代哲学辞典』に関する文献

備えてはじめて分析が可能となると主張した。しかもその分析は、ただに病理に限定された分析にとどまらず、ヴァイツゼックがゲシュタルトクラインスの語で述べるように、生物が生きているということは、それが外界との「つながり/相即」を保っているということであると述べた。講演では、「聖地がある場所と悲哀のある場所は同じである」、「神への上昇の道は自己自身への下降の道である」など、印象深い表現が随所に用いられ、力強く内容豊かな印象を覚えさせるとともに、無という視座が、自己/世界、仏教/キリスト教など、いかなる立場にも束縛されえず、むしろこれらを融通無碍に貫くよう取り扱うこととが説得力をもって示された。

木村氏は精神科医としての長い豊富な臨床経験に基づき、年間の豊富な臨床経験に基づき、臨床と西田哲学との対話を講演において試みられた。木村氏は、

講演を通じて、田中、木村両氏とも「世界」もしくは「自己と世界」という深長な問題を多面的に扱い、互いに響きあう内容がはからずも展開されたようになされた。

二十二日の午前の部では研究発表が行われ、松本直樹氏(京都府立医科大学)「西田幾多郎『善の研究』における過去意識の問題」、三宅浩史氏(金沢大学)『現代哲学辞典』に関する文献

的比較考察——三木清を中心とする哲学辞典編集史の一端」、上原麻有子氏（明星大学）「西田幾多郎の身体論から女性の顔についての考察」、の三つの発表が行われた。松本氏の発表は、「善の研究」において「意味」が成立する契機として「過去」の問題が注目されるとの問題意識から展開され、現在と過去との関係性をめぐって「善の研究」にあっては、過去が過去たる意義を十全に發揮されるための場として現在が位置づけられるとの指摘が行われた。三宅氏の発表は、三木清が編集代表を務めた『現代哲学辞典』（日本評論社）の新版および旧版における項目



(アメリカ哲学・教育学・心理学・日本精神・日本の哲学)を比較することを通じて、そこから時局的文化的諸状況を窺おうとする広い視野から行われた。上原氏の発表は身体論の側面に注目し、西田哲学の身体論の核となる部分を整理して示し、その上で西田の視野には入らなかつた問題である「顔の問題」へと焦点を当て、さらにそこにおける幾つかの論点に対し「行為的直観」の立場から応用的説明を試み、さらに和辻哲郎の「肉体」と心の不可分性」に関する論究を参照して、「行為的直観」等の西田の論理においてはなお把捉し得ない点(例として氏は「顔

シンポジウム報告

の表情を介した生身の人間同士の微妙なやりとり」をあげられたが存することを指摘する意欲的な内容であった。

記念すべき第十回大会におけるシンポジウムのテーマは、「無」であった。提題者は、岡野利津子氏、長町祐司氏、氣多雅子氏の面々である。なお司会は、岡田が務めさせていただいた。

今までのシンポジウムのテーマを振り返ると、まず「場所」経験」「自覚」、さらに「生命」と西田哲学の中心的なキーワードが取り上げられた。ついで「哲学と宗教」「国家と歴史」という多層性のあるテーマが、また「身体」「我と汝」という現代哲学においても主要な問題に関し、西田哲学が論じられてきた。十年という節目となる今回は、端的に「無」というテーマが設定された。問題の根源性そのものから西田哲学を考える、とう趣旨のテーマ設定であった、と考えてよいであろう。



と思われた事柄のみに限つて以下に述べ、またシンポジウムでの質問等の紹介もあわせて報告をしておきたい。

には、「無」を巡るヨーロッパとは異なるもう一つの系譜というものがよく見えてきたようと思われた。

的異なりの発端が探れるのではないか、という示唆を氏の発表から筆者は受け取った。長町氏においては、「〈無〉理解の系譜学へ向けての思索的試み——マイスター・エックハルトにおける〈無〉を巡る問題脈絡からの、ハイデガーと西田の下での〈無〉の思索への照射——」という題でのご発表で、このタイトルからすでにその内容の意図は推測される。エックハルトを基底において、「無」理解を、ハイデガーと西田とい問い合わせ、西田の特質を浮かび上ががらせると、いう大論考が展開された。哲学の最高峰の稜線を辿るような氏の考察によつて、筆者には、「無」を巡るヨーロッパとは異なるもう一つの系譜というものがよく見えてきたようと思われた。

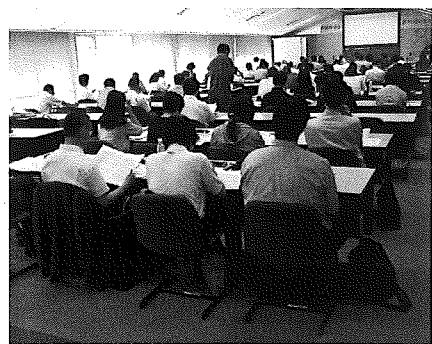
間の関係もあったので、おひとりお一人にまとめてお答えをお願いした。

岡野氏には、プロテイノスの叡智的質料について、また一者との合一が西田の場合には神秘的体験とされていないのではないか、という質問がなされた。さらに、プロテイノスにおける「個」ないし「魂」はどのように理解されているのか、また直観と反省は全く異なるのではないか、と問われた。

長町氏には、「無」とされるものの内実について、またエックハルトやプロテイノスと西田との「無」理解についての共通性が問題として出された。

氣多氏には、無のダイナミズムとして同時に「静即動、動即静」ということも言えないか、また非連続の連續ということが如何に言えるのか、について論議が向けられた。さらに、西田と西谷の相互における「歴史」成立の仕方について、また瞬間と時間の交わりについて等への質問が提議された。

最後に、ご出席であった上田閑照先生に、突然ではあったが、どういう問題であるかと先生は、改めて問い合わせた。「無を問題にするということは、問題にするとき、たいていは、「有と無」という仕方でなされ



は周辺が無い、とも言える)という二つの「無限大の円」の特質(中心を有つかどうか)を通して考察された点である。重々無尽ともいえる円の重なり合いの内に、しなやかな「無」の力動的特質が見届けられた。しかも西谷啓示をも考察の視圈に入れることで、「円」の問題から、歴史の成立に関しても論及された。西田のうちにきわめて西谷的なものがあり、逆に西谷のうちにきわめて西田的なものがありながら、両者がそれぞれに西田であり、西谷である、という思いを、筆者は氏のご発表を聞きながら得た。

お一人おひとりの提題の後に、提題者以外の方それぞれから質問を提示していただきながら、最後まで提題を続けた。その後しばし休憩を取つて、フロアからの質問を受け付け、時

西田哲学会第十年次大会は七月十二日から京都産業大学で行われた。第一日目の午前の部に「外国语セッション」として、西田哲学との連関の中で異文化間問題に関する発表と討論がなされた。第一発表者はアメリカ、ロヨラ・メリーランド大学准教授のブレット・デービス氏であり、「西田と異文化間対話の場所」という題で西田哲学が異文化間対話の場所を切り開く可能性と同時に問題点をも持つてゐることを指摘し、今後の異文化間対話の場所の開拓方を論究し

間の関係もあったので、おひとりお一人にまとめてお答えをお願いした。

岡野氏には、プロテイノスの叡智的質料について、また一者との合一が西田の場合には神秘的体験とされていないのではないか、という質問がなされた。さらに、プロテイノスにおける「個」ないし「魂」はどのように理解されているのか、また直観と反省は全く異なるのではないか、と問われた。

長町氏には、「無」とされるものの内実について、またエックハルトやプロテイノスと西田との「無」理解についての共通性が問題として出された。

氣多氏には、無のダイナミズムとして同時に「静即動、動即静」ということも言えないか、また非連続の連續ということが如何に言えるのか、について論議が向けられた。さらに、西田と西谷の相互における「歴史」成立の仕方について、また瞬間と時間の交わりについて等への質問が提議された。

最後に、ご出席であった上田閑照先生に、突然ではあったが、どういう問題であるかと先生は、改めて問い合わせた。「無を問題にするということは、問題にするとき、たいていは、「有と無」という仕方でなされ

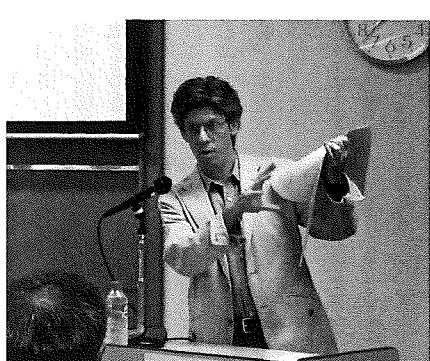
るのであるが、今回は「無」の一文字で提示されている。そのように問う場合に、何が問われているのか、という問い合わせの根柢的な「脚下照顧」なし「問い合わせ」を、最後に先生に提示していただいた。「シンポジウム」「無」という表示に、「無」いう事柄が大きく迫つてくる感をもつた、と先生は最後に語られた。深くて静かで、しかも新鮮な思いにさせられるご発言をいただいたことは、感銘深い出来事であった。

## 外国語セッション報告

### 異文化間関係の

#### 可能性をもとめて

松丸壽雄



た。第二発表者は、同じくアメリカ、ルター大学准教授のゲレオン・コップフ氏であり、「表現としての哲学——異文化間哲学の新形態に向けて」と題して、西田哲学を原点としながらも、さらにそこから発展する可能性を秘めた哲学を務合理作の考え方を基に追究した。以下、両者の論点を簡単にまとめながら、その後の討論の様子にごく簡単に触ることで、報告したい。

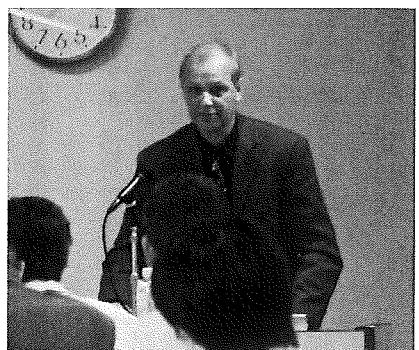
まずデービス氏の発表について簡単にまとめてみよう。西田は「学問的方法」にみられる「新しい世界的文化」を創造するといふ主張に着目して、二つの意味を考えをえていたとされる。即ち、他の多くの世界的文化と並ぶ一つの世界的文化といふ意味と、多くの文化的世界を包含しながらも、その内で多世界が互いに働き合い、或る世界を他の世界へ還元のできないそれぞれの等価的な文化の中でも、日本文化を特別に優れたところのあるものとして位置付けてしまったのである。つまり、他の諸文化を還元することなしに、包括する「一つの世界」の位置に日本文化を置いてしまったというようである。普通と特殊を融合してしまった普遍と特殊を融合してしまったような文化として日本文化を考へてしまつた節があるのである。

だが、本来から言うと、この一つの普遍的世界に含まれながらも、或る一つの文化的世界が他の文化的世界と相互作用を果

西田の躊躇をあげつらい、反論を擧げることに終始する非生産的な議論よりも、既に述べたような西田哲学の内在的な批判を我々は今行いつつ、異文化間関係を成り立たせる哲学原理を見出すことが、今に生きる我々にとって肝要」とデービス氏は主張しているように思われる。

続いての、コップフ氏の発表もやはり異文化間関係の新しい形態を求めて「表現」ということには着目したものであった。まことに、西田は「一と多の絶対矛盾」や「一即多」を造語して、大乗仏教への洞察に基づいた「歴史的世界」の概念を展開したが、彼の哲学の政治に関わる面は「国家主義的」として戦後は批判を受けることになつた。こういった背景があるなかで、弟子の一人である務台理作は、西田哲学における「一即多」と田辺哲学における「種の論理」とを結びつけて、第三のヒューマニズムを開拓しようとした。この務台の考え方をもう一步進める方向を目指して、京都学派の中で展開されたパラダイムを使いながら、眞の異文化間関係の原理となり得るグローバルな哲学を構想して、コップフ氏は次のように言う。

そもそも、どんな哲学も「世界の哲学」であるには、少なくとも三つの側面をもつてゐる。各文化として成り立たしめる開けとなるはずである。とすれば、



西田の躊躇をあげつらい、反論を擧げることに終始する非生産的な議論よりも、既に述べたような西田哲学の内在的な批判を我々は今行いつつ、異文化間関係を成り立たせる哲学原理を見出すことが、今に生きる我々にとって肝要」とデービス氏は主張しているように思われる。



続いての、コップフ氏の発表もやはり異文化間関係の新しい形態を求めて「表現」ということには着目したものであった。まことに、西田は「一と多の絶対矛盾」や「一即多」を造語して、大乗仏教への洞察に基づいた「歴史的世界」の概念を展開したが、彼の哲学の政治に

述べている。しかし、務台はこれに加えて、彼の師である田辺元の「種の論理」を導入し、相互通定には第三項として文化や宗教あるいは地方語などの種、即ち個と全体は「特殊的全体」としての種、によって媒介されねばならない、と考えた。これによつて歴史的世界は特殊的方向を取るに到る。

そして、絶対に相矛盾するものの最も原初的にして具体的なものは、「個」である。この互いに相矛盾する個を包むことのできる場は、絶対無の場所である。この絶対無の場所の考えに立ち、これを徹底する限り、一つの文化が優位をもつて、他の文化を包括してしまうような関係は成り立つことはない。つまり、絶対無の場所は世界の諸文化を包括しながらも、各文化を

しかし、西田に戻つてみると、一即多と同時に多即一の弁証法を解き明かすと同時に、我々が誰であるかを形成し限定する活動を「表現」として捉えている。西田によれば、我々は表現作用としてあり、同時に世界の自己限定が個物の自覚の限定と表現としてあるという仕方で、個別と普遍との相互限定について述べている。しかし、務台はこれに加えて、彼の師である田辺元の「種の論理」を導入し、相互通定には第三項として文化や宗教あるいは地方語などの種、即ち個と全体は「特殊的全体」としての種、によって媒介されねばならない、と考えた。これによつて歴史的世界は特殊的方向を取るに到る。

その後、司会者は、理論的に異文化間関係を基礎付けることのできる哲学をお二人の発表者は考究されたが、現実の世界は、シリアルにおける内戦状態や、世界中で紛争が絶えない状態であつて、異文化間の交渉など容易には起こりえない状況である。そうとすれば、上に述べられたような可能性をもつ哲学は、具体的にどのように現実世界に対処できるのであろうかと

いう問い合わせを投げかけて、それに立場を無限に含みうるものとなる哲学となることができる。こから敷衍すれば、自覚の自己反省的ディスクースとしての哲学は、常に異文化間関係的であり、グローバルなものとなるにちがいない、なぜならば個の自己は他者の観点をすべて含まざるを得ないことになるからである。このように、哲学は「表現」として捉えられるべきである。

エッセイ

編集委員長を終えて

## —フライブルクに寄せて—

淺見洋

次の委員長を引き受けたいた  
だける方がおられるかどうか若  
干不安であったが、無理を承知  
で早稲田大学の小林信之先生に  
お願いしたところ、ご快諾？  
いたいた。その新編集委員長  
からメールでこのエッセイの依  
頼を受けたのは、九月十四日、  
南独のフライブルク滞在中のこ  
とである。

編集の拘束から解き放たれ、  
校務の合間を縫つてフライブル

一一〇一二年七月の理事会を最後に三年間の西田哲学会編集長の重責を終えることができました。編集にご協力いただいた方々と寄稿していただいた方々に心からの感謝を申し上げます。時間的に忙しい思いをしたが、この三年間、年報、会報編集のために最新の西田哲学研究の成果である国内外の諸論文、講演原稿、寄稿文を読ませていただいたことは何にも勝る貴重な経験であった。正直、査読等に難波した論考もあったが、それはそれで教えられるところが多く、沢山の知的な刺激をいただいた。

（新教出版社）の原著者クリスティン・ラマー博士（フライブルク福音大学教授）とお会いするためである。ラマー女史は、一九六三年生まれで、牧会心理学やSeelsorge（魂のケア）の研究、スペーバイザーとして、現在ドイツ圏で最も注目されている実践神学者であり、今回の翻訳書（原題Trauer verstehen）を刊行されたのは、一〇〇四年、四十歳になったばかりのことである。

フライブルクには九月十三日の夕に到着し、翌日、もう一人の共訳者であるドイツ在住の若手研究者を加えて、三人で、旧市街地の伝統的なドイツ料理のレストランで昼食をとった。その時のことを回想すると一つの連想が出現した。西谷啓治先生が『風のこころ』で書いておられる「飯を喰つた経験」というエッセイの情景の想像である。今から、約七十五年前、ある。一九三八年の秋、フライブルク大学に遊学していた西田幾多郎の姪・高橋ふみに招かれて、郊外のグュンタルスタイルの下宿で、日本食をご馳走になった。その時の「米の飯や味噌汁とはこんなに旨いものだったのか」という驚きの経験から、西谷先生は西田の純粹経験を見事に解

クに来たのは、この秋に刊行する共訳書『悲しみに寄り添う』（新教出版社）の原著者クリスティン・ラマー博士（フライブルク福音大学教授）とお会いするためである。ラマー女史は一九六三年生まれで、牧会心理学やSeelsorge（魂のケア）の研究、スーパーバイザーとしては現在ドイツ圏で最も注目されている実践神学者であり、今回の翻訳書（原題Trauer verstehen）を刊行されたのは一〇〇四年、四十歳になつたばかりのことである。

私が高橋ふみの足跡を訪ねて、初めてフライブルクに来たのは四十歳前半の一九九四年夏のことであり、その時、最初に訪れたのがグュンタルスツールである。このフライブルクへの取材の旅を経て観光した『高橋文のフライブルク通信』や『未完の女性学者 高橋ふみ』は拙い書ではあるが、私の西田研究の出発点になつた一冊である。いつの日か、今は不十分であつたと感じる高橋ふみの紹介をもう一度できたらとも考えて

表紙には「Trauer braucht eine Heimat（悲哀はハイマート＝故郷を必要とする）」とあった。西田は「哲学の動機は悲哀である」と書いているが、思索の旅も人生の旅もハイマートからハイマートへの道すがらなのだろう。この三年間の編集という道すがらも確かに私の旅の中に織り込まれた貴重な経験であり、そうした経験を積み重ねながら私はハイマートへの旅を続けているのである。

昭和十五年西田先生は文化勲章を授与されました。旧制中学二年、担任の先生から「このクラスで宇野氣村から来ている者は手を上げろ」と云われたので手を上げたら、「西田先生は宇ノ氣村出身のどえらい哲学の先生で『絶対矛盾的自己同一』ということを云われている。しかし覚えておくように」といわれました。

- 一、記念文庫の開設
- 二、伝記の編輯
- 三、頌徳記念碑の建設
- 四、西田哲学の普及

です。

西田幾多郎記念哲学館で行われている夏期哲学講座は、主任講師大橋良介先生で十年、松丸壽雄先生・森哲郎先生で二十年、今年で三十二回を迎えるました。

テキストを丹念に読んで西谷啓治先生に教えていただく主旨で発足した西田哲学研究会には、堀尾孟先生、築山修道先生の御縁で参加させていただき、四十年をこえる月日が積み重ねられてきました。

## 理事会報告

### 理事会「旧理事による」

年次大会初日を開催される恒例の理事会が、七月二十一日(土)、大会開催校京都産業大学内の会議室で行われた。出席理事十五名、委任状提出による欠席理事九名、幹事四名で、議長は松丸会長が務めた。

### 一、第十一回年次大会について

二〇一三年七月二十日(土)と二十一日(日)に開催することが確認された。開催地は順番通りに東京とし、開催校候補として立正大学が挙げられた。ただし、確定が出されるのは来年二月頃となる見通しである(決定次第H.P.に掲示)。内容については秋の理事会で検討することとした。

### 二、理事選挙報告

大熊理事より理事選挙の結果とともに、理事候補者全員から就任への承諾を得た旨報告がなされた。

### 三、編集委員会報告

論文応募者から要望のあった「掲載証明書」の書式についての提案と検討がなされた。「掲載証明書」は、手直しが済み、最終的な原稿が完成した段階で発行することが確認された。

### 四、事務局報告

(一) 会計監査と予算案  
事務局より、二〇一一年度の会計監査と二〇一二年度の予算案が報告され、承認された。繰越金が減少傾向にあることを受け、印刷・製本費の見直しが提案された(具体案としては、複数の業者への見積りや抜き刷りの実費化など)。

### (二) 入会と退会

事務局より、二〇一二年入会希望者(A会員五名、B・C会員三名)、会員種別変更希望者(三名)、退会希望者(二〇一一年度八名、二〇一二年度二名)が報告され、承認された。

### (三) 引き続き、三年間会費を滞納してい

る除籍候補者について報告がなされた。連絡がつき且つ会員継続の意思がある人には会費の納入を勧め、未納の場合は除籍することとなつた。

都立芸術大学で開かれることとなつた。連絡がつき且つ会員継続の意思がある人には会費の納入を勧め、未納の場合は除籍することとなつた。

西田哲学研究会事務局  
nishidaphi@mx9.ttcn.ne.jp

## (iii) 締め切り

一〇一三年四月二十七日(土)

### (iv) 備考

二年以内に、研究計画報告書を提出していただことになります。報告形態は、刊行物のコピー、抜き刷り、あるいは四千字程度の報告文書とし、提出先は上記の氣多研究室とします。

西田哲学研究基金運営委員会  
二〇一二年度代表 森 哲郎

## 「西田哲学研究基金」について

### 三、その他

(一) 新入会員について  
二十一日の理事会後に入会申込をした1名の入会が承認された。

(二) 次年度大会における外国语セッションについて  
嘉指信雄氏を司会者とし、嘉指氏の勤務校の留学生と小田桐拓志氏を発表者として外国语セッションを開くという提案があつた。この案については、幹事会で改めて検討し、理事会で審議することとなつた。

(文責 秋富克哉)  
慎重な審議の末、全会一致により松丸壽雄氏が会長に再任された。  
他の役員については、以下の候補が出席理事全員の賛同によって議決された。

### 一、新体制について

慎重な審議の末、全会一致により松丸壽雄氏が会長に再任された。

出席理事全員の賛同によって議決された。

### (一) 委嘱理事(国内・国外)

小林信之氏(新編集委員長)、エンリコ・フォンガロ氏(イタリア語圏)、ジェイムズ・ハイジック氏(英語圏)、スペイン語圏)、ミシェル・ダリシエ語圏)、ロルフ・エルバーフェルト氏(ドイツ語圏)

(二) 編集委員会  
小林新編集委員長が新編集委員会を新理事の中から選出し、次回の理事会で決定する。

### (三) 会計監査

事務局から、上原麻有子氏、嘉指信雄氏に打診。辞退者が出了た場合は、轟孝夫氏に打診する。

### (四) 幹事会

事務局から、秋富克哉(akitomi@kit.ac.jp)案内は、基本的にメールで行ないますので、参考ご希望の方は、このアドレスまでご連絡下さい。

### (五) 西田哲学研究会「於東京」

毎月一回、読書会を開催しています。

原則として第四土曜日の午後三時から六時までですが、都合で日程が変更になることがありますので、関心のある方は左記の事務局までご連絡ください。

第十一回年次大会(平成二十五年七月開催)の口頭発表者を公募します。

応募者は三月末までに、八〇〇字程度の要旨と簡単な経歴・業績表を添えて事務局へお申し込み下さい。

## 「年次大会」における 口頭発表の応募について

### (i) 口頭発表の応募

西田哲学研究会「於東京」

原則として第四土曜日の午後三時から六時までですが、都合で日程が変更になることがありますので、関心のある方は左記の事務局までご連絡ください。

第十一回年次大会(平成二十五年七月開催)の口頭発表者を公募します。

応募者は三月末までに、八〇〇字程度の要旨と簡単な経歴・業績表を添えて事務局へお申し込み下さい。

### 編集後記

前編集長・浅見洋先生に代わり、今号から会報と年報の編集を担当するようになりました。

歴代の編集長と各執筆者の方々のご努力により、会報・年報ともに年々充実した内容となつてきましたことを実感しております。それだけに、新たに会誌編集の責任を

していただことになります。報告形態は、刊行物のコピー、抜き刷り、あるいは四千字程度の報告文書とし、提出先は上記の氣多研究室とします。

西田哲学研究基金運営委員会  
二〇一二年度代表 森 哲郎

西田哲学研究会年報掲載論文の公募について

西田哲学研究会年報掲載論文の公募について

西田哲学研究会年報掲載論文の公募について

西田哲学研究会年報掲載論文の公募について